

秋季大会発表要旨

特集

近代日本の宗教と差別

——せめぎあう〈差異〉と公共性——

【特集の趣旨】

運営委員会

本特集では、近代日本の差別を宗教という視座から照射することを試みる。さまざまな場所や信仰における〈差異〉をめぐる問題を文学がいかに描いたか、あるいは描き得なかったのか、そしてそれぞれの場でどのような公共性が形成されていたのかという問いについて考えたい。なお、ここでの「宗教」とは、集団的にある思想体系を信仰する共同体のことである。ある宗教を信仰することによって生じる〈差異〉が引き起こす対立構造や加害と被害の問題は社会的な事象としてだ

けでなく、文学においても表象されてきた。集団が形成されるときに排除と包摂の問題を、信仰という側面から問い直し、そこに文学がいかに関わるのかを明らかにすることこそ、この特集の目指すところである。

近代国家は国民として人々を統合するものではあるが、それは逆説的に多くの〈差異〉をその内部に取り込むものでもある。とすれば、近代国家は、それが形成されていく中で、経済、政治、思想などをめぐって社会的な〈差異〉を生み、顕在化させる機構であったと言えられよう。そして、その社会的な〈差異〉が対立や優劣を生み出すことによつて差別が発生していくという構造的な問題が可視化されるようになった。

近代日本における思想的〈差異〉の衝突の

一つに大逆事件が挙げられる。この事件が民衆だけではなく、森鷗外など多くの文学者に影響を与えたことは周知の事実である。大石誠之助がキリスト者として、高木顕明は浄泉寺住職としてこの事件に関わりを持ったことを踏まえると、天皇制に対して距離をとろうとする宗教の〈差異〉に関する問題も見逃すことはできない。天皇を冠する国家神道もまた一宗教であることを思い出せば、近代日本も信仰を媒介にした公共圏である。しかしその内部には別のさまざまな信仰が存立し、差別を生み出すということも見えてくる。宗教はそれぞれの時代や場所（土地）によつて、宗教自体がイデオロギー性を孕む一方で、国家的なイデオロギーと対峙することもあり、国家的な公共空間とは異質な公共性を有する討議の場を形成する要因となった。

本特集ではこのようなローカリティの問題を視野に入れながら、その場所で生まれる宗教の有り様をも議論の射程に含めることによつて、一側面だけではない立体的な議論の可能性を模索したい。例えば、長崎という場所の宗教を問題とした作家に遠藤周作がいる。また逆に、ローカリティをもたない人々

の存在も見落としてはならない。自らが生まれ育った場所とは異なる場へと流浪せざるを得なかった漂泊の民を描いた文学作品を通して、そうした人々の声にも耳を傾けたい。

2022年は、全国水平社宣言から100年という記念の年にあたるが、その中で問われた差別問題が解決されたとは言いがたい。むしろ、グローバル化社会やジェンダーにおける多様性を認めようとするが故に、新たな差別が生まれる事態が生じている。本特集で、幅広い時代やさまざまな場所、多様な宗教における〈差異〉を照射していくことによって、現代的な問題とのつながりについても考えをめぐらせた。

生の形式の臨界

Ⅱ 消尽と新たな〈生〉

——サバルタンと宗教——

友 常 勉

日本仏教における差別戒名、人間を神の似姿とするキリスト教における動物性の排除、

異性愛的家族主義、血の純潔の象徴性など、神学的体系的な宗教は差別を随伴している。だがここでは「宗教と差別」という問いをサバルタン研究の言説を介して転位させてみた。

17世紀初頭の宣教師サルバネスの書簡は「朝鮮で生まれたジュリア」や、殉教者の捕縛を拒否した三名の「かわた」の殉教的行為を伝えており、近世日本の身分制度を超越していたキリスト教の卓越性を示している。

西洋の倫理と政治の起源を4、5世紀から中世にかけての修道会規則の形成のうちに遡及する。ジョルジョ・アガンベンは、聖服の着衣や日々の務めといった形式が内容に優越し、やがて財の放棄が所有そのものの放棄へと、そして貧しさの所有を通して自由意志の放棄にまで達した生の形式の発展を記している。

「どちりいな・きりしたん」の問答における自由Ⅱ解脱という解釈、あるいは殉教者「トクアン」が宣教師モラーレスに送った感謝の言葉（「おかげ」は、キリスト教の「あにま（アニマ）」と日本の民衆思想との習合を意味している。さらに19世紀なかばの盛岡の

百姓一揆・三閉伊一揆のリーダー・三浦命助の「をんかだつ（御形）」という、自らの内部に着座している信仰の対象・神的存在を添えてみれば、ここには自由意志を放棄した主体の脱自的な構造がある。それは、近代性や商品制社会と対峙するために、小林秀雄がそのドストエフスキー論で示したような、福音書の他者性を期待する態度ではない。神との間に距離をおかないのである。

宗教的な生の形式は脱自的な生の通路を有している。この脱自への問いかけに、大本教の出口なおや、被差別部落出身の浪曲師であり、浄土真宗の信徒として「仏教講談浪曲運華節」を僭称した遠田良善らの実践を添えてみよう。サバルタンはその口承的实践を通して、王、地主、隣人、旅人を平等化する。そのような観点から、「宗教と差別」という問いの臨界点をなぞってみたい。

遠藤周作の「弱者」再考

——「かくれ切支丹」表象の変遷を

視座として——

小 嶋 洋 輔

遠藤周作は「日本のカトリック作家」という肩書が示すように、「強者」、「中心」である「西」カトリックに、ローカルなもの「東」日本を「弱者」として対置させて多くの作品を書いてきた。そして、さらにその「日本」という大きなローカルの中に「強者」、「弱者」の構図を見出し、その差別される「弱者」の側に常に立ち作品世界を構築したといえる。さらには「普遍性」を見出すために、逆に「弱者」（「かくれ切支丹やハンセン病など）を題材にしていったということが出来る。たとえば、（かくれ切支丹の問題でいえば）、かくれ切支丹の形成した場を特殊・限定的なものとして、「日本的」なものとして拡大していった。そしてその「日本的」ものが逆に「普遍」に通じるという論法である。つまり遠藤は「差

異」、「差別」を浮き彫りにしつつ、そこから「差異」、「差別」を乗り越えるような「普遍」の存在を希求し、その作品化を目指した作家といえる。

本発表では、こうした遠藤の戦略の変遷を細かに辿り直したい。主として扱うのは、一九五九年以降、長崎を舞台にしてかくれ切支丹の問題を書いた作品群である。たとえば、「最後の殉教者」（『別冊文藝春秋』一九五九・二）、「その前日」（『新潮』一九六三・二）、「帰郷」（『群像』一九六四・九）、「雲仙」（『世界』一九六五・二）、「沈黙」（新潮社一九六六・三）、「母なるもの」（『新潮』一九六九・一）、「小さな町にて」（『群像』一九六九・二）、そして「朝日新聞」に一九八〇年から一九八二年にかけて二部構成で連載された「女の一生」などを想定している。また遠藤は、「純文学」とそれ以外のいわゆる「中間小説」を戦略的に書き分けた作家でもある。その書き分けは、かくれ切支丹の描かれ方によつて作用しているのか。「中間小説」におけるかくれ切支丹の表象も踏まえて考察する予定である。

来年で、遠藤の生誕百年となる。遠藤周作研究の蓄積を紹介、検討しつつ発表を行え

ばと考えている。

被爆地「長崎」

——差別の輻輳——

篠 崎 美生子

原爆投下後、長崎／浦上の地に宗教をめぐる差別が発生したことはよく知られている。被害の少なかつた長崎市南部の人々の中から、「お諏訪さま（諏訪神社）」に守られた氏子の自分たちに引き換え、北部の浦上の人々はキリシタンであるがゆえに被害に遭つたのだという声があつたのである。カトリック信者の永井隆が浦上への原爆投下をむしろ「神の摂理」（『長崎の鐘』）と説き、聖地浦上の犠牲があつたからこそ世界に平和がもたらされたのだと述べたのは、先述のキリシタン差別に対抗したものだと言われている。しかし、天皇とアメリカの責任を免罪する意味を持つこの「浦上燔祭説」（高橋眞司）が、浦上のみならず「長崎」を代表するものとして全国的に認識されるなかで、「永井」的では

ないさまざまな言説が不可視化されていたのもまた確かである。

今回はそうした問題意識の上に、当時の「長崎」において不可視化された被爆者の声を掘り起こした好例として、佐多稲子「樹影」を主に取り上げることにする。中国籍であり、かつ仏教徒でもある女性、柳慶子が、「被爆者」の枠にも「長崎人」の枠にもなじめずにもがく姿からは、宗教のほか、国籍、ジェンダー等にまつわる差別が錯綜したさまを見ることができよう。この小説は、原爆という事態が複数の差別の線を隠微な形で走らせたことや、複数の差別を受けた人々がいかにして言葉や、複数の差別を受けた人々が見せてくれているのではないか。このような点について、また、柳慶子がルートツや居場所を求めて試行錯誤する姿などを通じて、他の登壇者との議論を深められれば幸いに思う。ほかにも、林京子、井上光晴の諸テキストも視野に入れていきたい。

現実と理想、分断と連携

——定住・定職に規定されない
生活を描く——

ブルナ・ルカーシユ

日本にかつて浮浪罪というものがあつた。警察犯処罰令第1条に「一定ノ住居又ハ生業ノ勾留ニ処ス」と記され、「住居」と「生業」を保持ことが法律上義務とされていたことがわかる。戦前に濫用されたため今は稀にしか適用されないが、軽犯罪法第1条に「生計の途がないのに、働く能力がありながら職業に就く意志を有せず、且つ、一定の住居を持たない者で諸方をうろついたもの」は「拘留又は科料に処する」と、かつての警察犯処罰令と大同小異の内容が記されている。近代以降、何らかの理由で定住・定職を持たず、定住・定職を基盤にして形成されてきた社会から逸脱した「浮浪者」が、権力からターゲットに加えられてきたわけである。定住・定職という

共通の理念が共有される社会の（内側）の者もまた、自己を正常と見做し、生活様式も生活上の価値観が異なる（外側）の他者を異常者として排斥してきたことも想像に難くない。どこにも長く止まることなく転々と世の中を渡り歩くという「浮浪者」たちは、その「非近代的」な生活態様のため、幾重もの迫害にさらされてきたが、その姿はしばしば文学作品にも書きとめられてきた。本発表では、浮浪や放浪、漂泊をキーワードとして近代文学を考へることが極めて重要かつ示唆的な視点であるという問題意識をもって、明治末期・大正期の作品に着眼し、その中に描かれる浮浪・放浪・漂泊はどのような意味を付与されているかを検討したい。その際に、とりわけ小栗風葉の晩年の名作「世間師」とその周辺の作品に焦点を当て、社会の（内側）から排斥され、一方その規定にも束縛されない放浪生活にどのような思いが託されているかを考察していく。

秋季大会研究発表

個人発表

「Hero」としての「男本尊」

——坪内逍遙『小説神髓』

「主人公の設置」を中心に——

大橋 崇行

本発表は、坪内逍遙『小説神髓』（一八八五〔明治十八〕～八六〔明治十九〕のうち、特に後半部分の「主人公の設置」脚色の法則」に注目することで、『小説神髓』を再読しようとする試みである。

『小説神髓』の研究においては、「小説の主脳は人情なり世態風俗これに次ぐ」（『小説の主眼』に代表されるような理念的な部分が分析の中心となってきた。具体的には、「小説総論」「小説の主眼」など、主に前半に書かれている内容である。一方で後半部分につ

いて言及がなされるときは「文体論」や曲亭馬琴をめぐる議論が取り上げられることが多い、それ以外の小説の具体的な書き方については述べられている箇所については、研究の対象として扱われることがきわめて少なかったと指摘できる。

たしかに『小説神髓』の後半は、現代の視点から見ると、小説を書くためのハウツー本的な内容として位置づけられてしまう。しかし坪内逍遙が『小説神髓』を書くに当たって英語圏の修辭学を多く参照していたことを踏まえれば、前半の理念的な部分と後半の具体的な小説の書き方についての内容とは一体として書かれているはずであり、したがって後半部分がどのような文脈のもとで編成され、どのような内容を持っていたのかを具体的に考えることによって、前半の読解も変わってくるように思われる。

以上のような問題意識のもと、本発表ではまず、「男本尊」「女本尊」と呼ばれる「主人公」がどのように論じられているのかを、特

に同時代の英語圏で編成されていた「Hero」[「Heroine」]「Character」をめぐる言説との拘わりから確認する。その上で、そこで論じられた「主人公」の「人情」が、同時代に西洋から入ってきた修辭学や心理学の論理とどのように拘わるのかを分析することによって、『小説神髓』全体の論理を再検討していきたい。

内容から現象論へ

——1900年から1920年の

日本における手紙ディスコースの
再考へ——

ケビン・ニーハウス

本発表では、「手紙の黄金期」とでも呼べる1900年から1920年の間に発行された「手紙雑誌」や「文章世界」等の文芸雑誌に形成された手紙に関するディスコースの分析を志す。三部構成発表の第一節では、(i)手紙は「真情吐露」するのに最も適切な文形式であり、(ii)「真情吐露」に最も適切な言語は言文一致である——近代日本文学研究

者が維持しているこれらのナラティブが成文化された過程を調べることにより、当時の雑誌や新聞等のメディアにおける手紙に関する議論の多様性が見落とされてきたと論じる。

第二節では、明治時代の作家や歴史家が日本における手紙の歴史の必要性を見出したと指摘し、いかに『文人が綴った手紙』に関する近代以前の歴史』が明治期になってから形成されたかを述べる。「西洋」との文化均衡達成のために意図的に構築されたという点を論じる一方で、その過程で手紙がジェンダー化されたことをも指摘する。第三節では、手紙の内容のみに注目するのではなく、郵便制度確立後、手紙との「遭遇」と共に現れた新たな経験と情動を詳述することで、「手紙の現象論」を提示する。ここで述べる新経験とは新しい想像形式に限らず、スピード、同時性、そして偶発性という見落とされがちな感覚や感情も含まれている。

『道草』における時間

——ベルクソン『時間と自由』との
接点から——

王 青

漱石『道草』（朝日新聞）大正四・六・九）は主人公健三と、長年会っていないが養父島田との再会から始まり、島田夫婦が健三に金の無心を迫ることと、妻御住との緊張に満ちた関係を描いていると同時に、回顧的に語られた健三の幼年期の記憶も全体的に織り込まれている。本作における時間の書かれ方については多くの研究成果がある。とりわけ藤尾健剛（一九九八）は本作の時間編成の基軸が目前の未来を見通せない健三の内在的視点になることを指摘し、健三の生を「体験されるままに描き出そうとする試み」だと物語の編成から本作の特徴を捉えている。しかし、健三の時間の観念から見られる「連続的」で「異質的」（ベルクソン『時間と自由』、一九一〇）な時間のあり方について、まだ議論されてない。

常に過去の追憶に浸りつつある健三とは対蹠的に、島田は「過去に無感覚」であり、養母御常も「収入の高」という唯一の尺度で人間の価値をはかる人で、「昔の憎悪、古い愛執」といった感情が「金」と共に消え失せてしまふ。それに対し、健三にとって時間は織物のように「縞柄」や「地質」を持ち、感情と触感に伴う「異質的な」ものである。それは忘れられても常に想起可能で、漱石が明治四十四年に読んだベルクソンの『時間と自由』と重ねて解読することができる。ベルクソンによれば感情や感覚を含む「質」こそ時間のあり方で、たとえ過去が「淋しい田舎」という空間に転写できても、それは時間の瞬間的な断面に過ぎず、時間の流れに充溢する情緒や感覚など測量不可能（質的）且つ分割不可能（連続的）なものこそ、時間の実相を表している。

本発表は健三と島田・御常との人物像の対照的な構造及び健三の時間の観念を考察し、『時間と自由』との接点から『道草』における時間のあり方を明らかにする。

「或る女のグリーンプス」から
「或る女」まで

——嗅覚による内面世界の
表現の獲得——

唐 銘 遠

「或る女のグリーンプス」から「或る女」への改稿とその後編の創作において、有島武郎は文学者として多くの工夫を施した。それら的一部についてはすでに先学による指摘が多々見られるが、嗅覚表現の重要性については看過されている。

有島武郎自身が述べているように、「或る女」で有島は「勝気な鋭敏な急進的な女性」(1919c、黒沢良平宛書簡)を描こうとした。客観世界の細部までも内面世界へと取り込むことを意味する「鋭敏」さは、まさに嗅覚などの感覚表現を通してようやく実現される。つまり、「或る女」における客観世界と主人公の内面世界との連関性を明らかにするには、嗅覚表現が重要な手がかりになる。

実際改稿前後を比較すれば、「或る女のグ

リンプス」(『白樺』1911.1～1913c、以下同。)では「内田の妻君は遙か年下の田鶴子の言葉をしみじくと聞いてうなづいて居た。」(第二巻第六號P.6)と、二人の対話における内田の妻君の動作と田鶴子が年下である事実のみが描かれていた。しかし、「或る女」(叢文閣、1919、以下同。)ではその細君の身なりに対する詳細な描写として、「その柄の細かい所には里の母の着古しといふやうな香ひがした。」(上巻P.65)と、嗅覚表現が新たに現れる。

また、明らかに嫌悪感が見られる「臭氣苦しく感ぜられる」(船室(カビン)の空氣(第二巻第十一號P.83)も、「汽船特有な西洋臭い匂」(上巻P.110)と改められ、比較的ニュートラルな表現になる。

そして、「車夫」のする「紺の香」(第二巻第一號P.29)の表記も、「或る女」では「香ひ」(上巻P.4)に置き換えられた。「ひ」を以て「にほひ」という語を前面に出す意図が確認できる。

このように、「或る女のグリーンプス」から「或る女」の誕生において、有島が注いだ力は嗅覚表現に多く見られる。本発表は、これらの

嗅覚表現を見つめ、プロットの展開と作人物の造形などにおける嗅覚表現の役割、いわゆる伏流としての「近代」嗅覚を考察したい。

内田百閒「猫」と『新青年』

——初出雑誌の特性を視座として——

松 原 大 介

内田百閒「猫」は『旅順入城式』収録作中唯一『新青年』(第一〇巻第六号、一九二九年五月)誌上に発表された小説で、「私」が岩佐の来訪を勘違いと結論付けるエピソードが、隣室に侵入した猫との曖昧な関わりの中で描かれる。

先行論において「旅順入城式」収録作の一つとして論じられることがほとんどであった「猫」は、たとえば西井弥生子氏が「猫が知人に化けていた」可能性に触れているように、内容の怪奇性が指摘されてきた。しかし、初刊のまともから一度離れて初出雑誌の空間に「猫」を置いてみたとき、作品で展開される岩佐の不自然な来訪への「私」の反応

には、初出雑誌『新青年』の特徴が反映されていることがわかる。「私」が岩佐の來訪に対して疑問を持ち、座布団の跡や階下の音、岩佐の発言といった証拠に基づく（推理）により自身の勘違いと結論付ける過程は、『新青年』の代表的な読み物である『探偵小説』と重なり合う。また、自身の（推理）を無化する結末の「微笑」（初出誌のみ、初刊以降削除）からは昭和初期の『新青年』誌上において隆盛していた（ナンセンス）や（ユーモア）の手法を見てとることも可能だろう。その一方では、（怪奇）として解釈され得る猫の存在も暗示的に示される。

本発表では、「猫」が『新青年』というメディア空間に親和性の高い（推理）や（ユーモア）を利用しながら、『新青年』読者の期待する読みと想定される理智や笑いという解釈には回収されない、「もやもやした無気味なもの」としてしか把握し得ない怪異を描いた作品であることを明らかにする。特に、科学的思考による『探偵小説』的発想には捉えられない（怪奇）という「猫」の構図は、対象の捉え難さを描く『冥途』諸作と通底しつつも、（怪奇）に現実的な解釈を与えない『冥途』諸作

とは異なる（怪奇）の表現を、雑誌メディアの特徴を利用しつつ百間が行っていたことを証するものと言える。

バチエラー八重子

『若きウタリに』の文体

——「連作」という視座から——

デイ・マルコ・ルクレツィア

アイヌ民族による文学は、アイヌ語のみで綴られた口承文芸として伝わってきた。しかし明治維新後、口承文芸筆録活動の傍ら、当時の表現者は自らの声を発する新たな手段を求め、日本語、またはカタカナ表記のアイヌ語交じり文体を用いた短歌・俳句・詩を詠み始める。これらの詩歌は、アイヌ文学における集団的な記憶による文学から、自己表現としての文学への変化を図り、日本語文学の中に近代文学としてのアイヌ文学を生み出した。

本発表では、このジャンルの代表者の一人であるバチエラー八重子（一八八四―一九六

二）による歌集『若きウタリに』（心の華叢書、竹柏会、昭和六年）を取り上げ、そこで用いられた文体について考察を行う。とくに、読者として想定された同族に一貫性を持つメッセージを運ぶ媒介としてこの歌集を捉えたときに、そこで使用される日本語・アイヌ語の言葉や短歌の繋がりをどう解釈すべきなのかという点に焦点を当ててみる。

まず発表の前半では、『若きウタリに』の短歌にカタカナ表記のアイヌ語が多く混在している点を踏まえ、歌集の第一篇を中心にアイヌ語と日本語の使い分けについて論じる。八重子のほかに、昭和初期のアイヌ歌人として挙げられる遠星北斗（一九〇二―一九二九）と森竹竹市（一九〇二―一九七六）もアイヌ語を詩歌に取り込んだが、ほとんどの場合は固有名詞に限る。八重子が使用する単語の幅はより広く、歌集の中でどのように働くのかを把握する必要がある。

また、個々の短歌は迫力が乏しく、物足りなさを与えるのに対して、連作として捉えたときに最大に力を発揮する。言い換えれば、『若きウタリに』の短歌は五七五七七の世界を超越し、八重子の思想を物語化していく点

に創意工夫が凝らされている。発表の後半では、八重子の短歌一首一首は『若きウタリに』という大きな絵を描くという視点から、短歌の繋がりや、それを反映する歌集の構成について論じてゆきたい。

小林秀雄と中原中也における

〈哀悼〉の交錯

——テキストの〈推敲〉を

視座として——

山本 勇 人

小林秀雄の文学には、表象困難な〈死者〉を言語によって表象し再現しようとする〈哀悼〉の主題が通底している。それは、彼の批評に特殊な言語秩序（詩的言語）を生じさせた。本発表は、一九二五年から三十七年の間、小林と共に同時代の文学状況を駆け抜けた中原中也を比較対象として、二人の表現における〈哀悼〉の交錯を明らかにする。

中原は、その詩に度々「死児」を形象化した（含羞）一九三六、等）。すなわち、詩語

をもって死者を「紙の上に再現」（小林「エーヴ・キューリー」「キューリー夫人伝」一九三九）した書き手である。また、彼の詩篇は、時に完成形（詩集）さえも書き換えてゆく複雑なテキスト行為によって生成する（加藤邦彦「中原中也と詩の近代」二〇一〇）。これと同様に、小林においても、削除・書き換えによる言説の揺らぎが、しばしば問題とされてきた（柄谷行人「懐疑的に語られた『夢』」一九八三、等）。

二人は、絶えざる「批評精神の活動」（中原「新文芸日記」一九二七）を経て、〈哀悼〉の主体へと変容してゆく。本発表は、その変容を、〈死者〉表象にまつわる彼らの〈推敲〉の分析をもとに跡付ける。とくに、最新全集では不十分な、小林の批評・訳詩・エッセーの校異を整理、検証することで、表現の変遷をたどる。とくに、中原の訳詩と相互作用的に更新された『地獄の季節』、「富永太郎の思ひ出」（一九四一）・「中原中也の思ひ出」（一九四九）など、友を悼む言葉の中に再生する詩語に焦点を当てる。中原詩における「死児」の形象についても、先行論を踏まえ改めて検討する。加えて、小林「現代詩について」（一

九三六）・中原「詩と其の伝統」（一九三四）といった両者の詩論および言語論などを補助線として、テキストの推敲を理論的に意味づけてゆく。

生まれては消え、時として復活・更新される言葉の動態のなかに、批評と詩の交錯点を見定め、今再び、二人の「関係」を読み替える。

武田泰淳「審判」と

上海現地メディア

——日本人居留民宣導政策と

その問題点——

藤原 崇 雅

武田泰淳は敗戦を上海で迎え、その経験を踏まえて一連の小説を創作した。それら小説の中でも、「審判」（批評）一九四七・四）は戦争責任の問題が描かれる点で、高い評価を受けてきている。

本発表ではこの作品を、蒋介石派国民党が設置した現地メディアである改造日報館発行

の紙誌『改造日報』及び『改造週報』などを参照しつつ考察する。戦後上海を統治した機關が規定した日本人居留民（「日僑」）のありようと、登場人物らの形象の比較を通じて、本作を当地の戦後処理とその問題点が表現された作品として読み直してみたい。

「審判」の登場人物である杉と二郎は、集中区と呼ばれる地域に移り住み、そこで戦争責任について話し合う。そして、杉の責任感には薄れゆく一方で、二郎の責任感は対照的に強まっていく。こうした登場人物の設定がなされた背景には、円滑な引揚げのために居留民の集中区を設け、指導部を除いた個人の戦争責任を不問に付した統治機關の政策があった。杉と二郎の人物像は一見対照的だが、現地資料と比較すると、両者の態度はどちらも宣導政策の結果と捉えられる。

さらに着目すべきは、蒋介石派国民党の採用した指導者責任観の問題点が、登場人物が映画を鑑賞する場面を通じて描き出されていることである。硫黄島の戦いが記録されたこの映画は、宣導政策に関連したものととして上映されている。しかし、それを観た二郎のなかで責任感が消え去り、道徳心を感じない状

態となる。映画は、再び人々を戦争犯罪へと駆り立てるものとして描かれているだろう。

戦後上海で日本人居留民に対して行われた宣導は、個人の戦争責任を不問にしたことで、映画の場面を通じて表現されている。従軍経験を通じて暴力行為に馴染んでしまった身体が戦争犯罪を再発してしまう事態に対処できない問題点を有していた。「審判」は、戦後上海という特殊な時期・地域における居留民政策の問題が描かれた作品として読めるのである。

戦争文学に描かれた「人間」と

その美意識

——多田裕計『アジアの砂』論——

邵 金 琪

一九五六年十一月に出版された多田裕計の『アジアの砂』（講談社）は、太平洋戦争中から戦争後の社会を背景にして書かれた長編小説である。作家の実体験を投影する形で造型された主人公の大野林次郎が、戦中の国策映

画会社である上海の日華フィルムに勤め、その後、上海をはじめとするアジア各地の戦場で歴史の嵐のなかに吹き曝されていく。

発行時の帯で、川端康成は、「歴史や社会の激流を厳しく受けとめつつ、ヒューマンな温かさを失われぬ小説」、石川達三は、「戦争の責任を政府や軍部になすり付ける事なく、自己の苦悩とするところに作家の良心がある」とした。また、奥野健男は『芥川賞作家シリーズ多田裕計集』（一九六四年）の「解説」で、本作には「作者の痛々しいまでの自己懲罰の精神と赤裸々な自己告白があらわれている」と評価している。

本発表は、主に二つの視点から考察する。一点目は、登場人物の造形である。戦場の状況が直ちに上海租界の中国人、日本人、ユダヤ人などの生活に反映されることから、それぞれの思想がぶつかり合う中で描き出された登場人物を考察する。また、戦死した主人公の兄の弔慰金をめぐり、家族内で問題が起こり、その「和解」が、長い時間を経て、戦後になってようやく果たされたことから、登場人物たちが戦争をどのように振り返り、総括したかについても分析する。

二点目は、漢学者であった父の影響を受け、美術の研究を志した主人公・大野の「美の追求」である。大野は、作品中に描かれたアジアの都市の「美」が、漢文学作品と共に、表現されたことに着目したい。さらに、同じく戦後に発表された『草萌えにシヨパンの雨滴に打ち来る』という短詩形文学論集も視野に入れ、多田裕計の美意識がどのように本作に描き出されているかを分析したい。

以上の二点を中心に、多田裕計の小説創作が「時局的」から「芸術的」へと変化していく過程を明らかにすることを本発表の目的とする。

寺山修司台本「盲人書簡(上海篇)」における「暗闇」と言葉

劉 夢 如

寺山修司台本の密室劇「盲人書簡(上海篇)」(初演一九七四年)は「見えない演劇」と銘打たれ、半ば暗闇の劇場で上演された。劇場の暗闇は「経験」として捉えられ、観客には

マッチが配られる。寺山はこの劇に「始源的な言語」を求め、観客に「超言語的な」もの、あるいは「本物」の体験を与えようとする。そこで志向されているのは、〈観劇〉というより〈感劇〉の体験である。

本作の題名はデイドロ「盲人書簡」に拠る。デイドロはここで、先天的な盲人が光と色に関する記憶を持たないことを問題化している。しかし、寺山作品の登場人物・小林芳雄は、盲目に「なつてしまった」盲人であり、過去の「記憶」を思い出してばかりいる。「小林芳雄」とは、江戸川乱歩作品の登場人物の名からの流用だが、「裸の肉声は、いつも惑はしに充ちた言葉といふ着物を着てゐる」(「モオツアルト」一九四六年)と語った、小林秀雄のパロディでもあるだろう。

台本が舞台設定として指示した「暗闇」は、劇場空間で観客に非言語的な体験を与えるための仕掛けである。しかし登場人物がセリフにおいて語る「暗闇」は、むしろ言語的な「記憶」を増殖させる契機となっている。台本の冒頭に引用された言葉は、ボルヘス「不死の人」(「伝奇集」)に拠る。これを変奏しながら、「盲人書簡(上海篇)」の登場人物は繁殖力を

持つ鏡と書物との関係を語る。本作が「暗闇」を通して提示するのは、視覚の問題であるよりもまず、言葉の問題なのである。演劇実験室・天井桟敷は本作をはじめ、「疫病流行記」(一九七五年)、「阿呆船」(一九七六年)の「密室劇三部作」を七〇年代半ばに上演した。本発表は、「盲人書簡(上海篇)」の台本を対象に、参照された先行テクストを考証し、劇場装置にしてセリフに語られた主題である「暗闇」について考察する。「超言語的な」体験をもたらずために劇場に導入された暗闇が、劇中世界においては、むしろ言葉のざわめきを生む。「始源的な言語」の追求よりも、この逆説にこそ寺山の密室劇の核心があることを結論として示す。

「G線上のアリア」を奏するとき

——二つの時代・言語にまたがる
台湾文字——

宋 元 祺

一九一四年に植民地の朝鮮に生まれた詩

人・金鍾漢の遺作「くらいまつくす」に、「三本の鉦が切れても G 線上のありあは奏でられる」という一節がある。言語を奪われたマイノリティが、マジヨリテイの言語を用いて声を響かせる。日本語文学を考察する際に欠かせない視点だと思われる。本報告は、日本統治時代の台湾の中国語作家としては王詩琅（一九〇八—一九八四）、日本語作家としては王昶雄（一九一六—二〇〇〇）を代表として取り上げ、二人の経歴にもとづき、戦前ににおける台湾新文学の発展を振り返るとともに、戦後三五年が経過した一九八〇年代に入り、忘れられてきた老作家たちとその文学がいか

に発掘され、台湾文学史に再登録されたのかの過程の整理を目的とする。

台北の万華に生まれた王詩琅は、一九三〇年代から中国語で創作していたが、三七年に新聞の漢文欄が廃止されると筆をおく。その後、淪陷期の広州へと赴き、終戦まで滞在し、戦後は台湾文学に関する資料の翻訳・整理・編纂に打ち込んだ。同じく台北の淡水に生まれた王昶雄は中学から大学まで日本で十一年間を過ごし、帰台後は日本語作家として一九四三年に「奔流」を発表し文壇に名を成した。

戦後はいち早く言語の壁を乗り越え、一九五〇年代から中国語で翻訳、詩、散文などを発表した。

一九七〇年代末以降、王詩琅の万華の家に若い文学者たちが訪れ、戦前の文学についてはインタビューをした。一方、王昶雄が世話役となつて「益社会」という老作家たちの集まりが作られ、これも戦前の台湾文学が語り継がれるきっかけの一つとなつた。本報告では、老作家たちがどのように戦前の文学活動を回顧し、文学史に再登録されることになつたのか、その過程を考察し、複数の時代・言語にまたがる文学がどのように奏でられたのかについて検討したい。

パネル発表

戦前期『サンデー毎日』の 視覚表象と文学

中村 健、荒井真理亜
三浦 卓、富永 真樹

(司会) 副田 賢二

週刊誌は、重厚な文学テクストや評論を掲載する権威化されたメディアとしての月刊総合誌・文芸誌、連載小説を継続的に、時事記事を即応的に掲載する日刊の公共的メディアとしての新聞に比べて、いわば「中途半端」な言説・表象の場と見なされてきた。明治期から継続する月刊誌や新聞に対し、大正期から出現した新たな、大衆的雑誌メディアとしての週刊誌は、その位置付けが不明確なまま、曖昧に「読み捨て」される場として扱われてきた。特に、出版社系週刊誌が隆盛を誇つた一九五〇年代以降に比べて、新聞社系週刊誌しか存在していなかった戦前期週刊誌のメディア空間は、文学研究の視座から、十分な

検証が加えられることはなかった。貪欲な大衆の大量消費メディアとして、同時代の言説空間の内部で浮遊していたそのような戦前期週刊誌への研究史的欠落を意識した上で、本パネル発表では、創刊一〇〇周年を迎え、その

歴史的評価を問われている一九二二年創刊の週刊誌『サンデー毎日』に焦点を当てた。その視覚表象とレイアウトを中心に、雑多な表象と言説の場としての『サンデー毎日』のメディア空間の様相を様々な角度から検証し、その同時代的意義とメディア史的特質を明らかにする。

中村健は、本科研費研究で作成した戦前期『サンデー毎日』特別号の視覚表象データベースに基づき、誌面の表象史を、レイアウトと表紙の変遷という視点から考察する。そのデータの定量分析から見出せるものとして、「股旅物の挿絵をめぐる問題が挙げられる。その表象の嚆矢は小田富彌だとされてきたが、今回のデータからは、大阪を本拠とした挿絵画家金森観陽の存在が焦点化される。そこでの「股旅物」の挿絵は、引き締まった肉体を描く方向に変わっていく。『サンデー毎日』に頻出する女性表象のみならず、男性の

造型についても、体のラインをリアルに描く方向に変化している。そのような初期『サンデー毎日』の挿絵の構図を分析するとともに、同時代のモダニズム表象との関わりについても検討する。

荒井真理亜は、草創期の『サンデー毎日』の視覚表象の形成について検討する。『サンデー毎日』は、一九二一年一〇月より発行されていた「日曜附録」の視覚表象を継承している。新聞社の発行する週刊誌として独自に発展していく『サンデー毎日』の視覚表象を、その「日曜附録」との関係の面から明らかにしたい。また、大毎社員であった名越国三郎だけでなく、多くの画家たちが両紙誌に挿絵を描いている。『サンデー毎日』の誌面からは、挿絵という視覚表象領域の多様なあり方が見えてくる。文芸を特集した「小説と講談号」の誌面の様相を分析することで、週刊誌における挿絵の役割や位置づけを考察する。三浦卓は、初期『サンデー毎日』を、文学者をめぐる表象と文壇ゴシップの角度から考察する。『サンデー毎日』のような週刊誌において「文学」のあり方は重要であり、白井喬二「新撰組」（一九二四・五・二五）が

示すように、雑誌の生存戦略とそこに掲載される文学テクストは不可分であったが、作家の身体やイメージと関わる「文壇ゴシップ」もまた、そこでの重要なコンテンツであった。初期『サンデー毎日』の文壇ゴシップ欄の試行錯誤の痕跡を確認し、そこで定着した書式の型が、視覚的にも重要な機能を果たしたことを確認する。文壇表象が風刺的漫画の題材になり、将棋などの他の有力コンテンツとも結びつけられる、その多様な視覚表象を分析したい。

富永真樹は、『サンデー毎日』での小村雪俗の挿絵の表現的特徴と画家の立ち位置を考察する。同誌の雪俗の挿絵は、雑誌の特徴を生かし、構図やレイアウトに様々な工夫を加えている。そもそも雪俗は特徴的画風を持つが、『サンデー毎日』ではことさら黒の印象的使用や独自の線描写を強調しており、同誌に掲載された他の画家との差別化を図っていたと考えられる。そのような雪俗の試みを分析し、そこにおける『サンデー毎日』というメディアの意義を考える。「雪俗調」で知られた雪俗の絵には特有のイメージが付与されていたが、それは江戸と明治、及びそこへの

憧憬の感情と深く関わっていた。そのような雪俗の視覚表象を通して、その画家としての立ち位置と、そこで当時要請されたものの内実を考える。

地方雑誌から考える戦後文化

——『占領期の地方総合文芸雑誌事典』を起点に——

石川 巧、大原 祐治
牧 義之、渡部 裕太

言論統制に苦しめられた戦争の時代をくぐり抜けた敗戦直後の人々にとって、出版物を手にとって読むことは、新しい時代の息吹を感じる魅惑の行為であったが、需要の高まりに十分応えるだけの出版物がすぐさま市場に流通することは難しかった。首都圏の印刷・出版機能が空襲によって失われた上、外地に存在した製紙工場からの供給ルートが失われたことに起因する深刻な用紙不足という事態が出来ていたからである。

一方、深刻な戦災を免れた地方では、戦前・

戦中期に行われた地方文化運動の展開や日本文学報国会地方支部の活動などに由来する人脈を土台としつつ、さらに疎開作家・文化人らを加えた形で積極的な文化発信が行われ、その成果を発信するメディアとしてさまざまな雑誌が刊行された。地方新聞が刊行する総合雑誌や文芸雑誌のような比較的大規模なメディアから、ごく小規模なメディアまで、敗戦直後の地方においては文字通り雨後の筍のごとく大量の雑誌が刊行されていた。

図書館等に必ずしもまとまった形で所蔵されてこなかった、こうした地方雑誌の様相については、不明確な点が少なからずあった。しかし、占領期におけるGHQ/SCAPの検閲資料であるプランゲ文庫（メリーランド大学）に関するデータベースの整備を受け、近年こうした地方雑誌を含む占領期の出版に関する研究は急速に進展した。本パネルメンパーも関与する形で刊行された『占領期の地方総合文芸雑誌事典』（二〇二二年、金沢文庫、以下『事典』）もまた、こうした成果の一つである。

本パネルでは、多くの研究者の協力によって成立したこの事典の成果を踏まえつつ、さ

らに残された課題の所在をも視野に収め、戦後文化の諸相について再考するための道筋を示そうとするものである。全体はメンバー四人の報告および参加者を交えた討議によって構成する。

『事典』共編者の石川巧は、編集作業を進めるなかで直面したさまざまな課題や困難を振り返りつつ、「総目次」「復刻版」「事典」「総攬」というキーワードから、これからの雑誌研究のあり方に関する提言を行う。雑誌研究の面白さは、タイトルや巻号から類推して、間違いなく発行されているはずだ」と思われるにもかかわらず、現物がどこにも保存されていないものが多いことにある。探索することの愉しき、苦勞のすえに見つけ出す喜びも重要だが、それ以上に意味があるのは、あらゆる手を尽した調査のすえに、自らの責任で、現時点では未見である」という一文を付し、自分たちの研究で明らかにできたことと次の世代に託すことを明確に区分けすることについて考えたい。

同じく『事典』共編者の大原祐治は、占領期における地方雑誌の中で女性を中心となつて編集・刊行が行われた数少ない事例として、

群馬県前橋市で刊行された『吾嬬』や、鹿児島県鹿児島市で刊行された『南海女苑』などを取り上げる。地方在住者や疎開者のみならず、ときに東京をはじめとする遠隔地に在住する著名な文化人からの寄稿を交えつつ、充実した誌面を実現していたこれらの雑誌が、どのような人的ネットワークに支えられて編集・刊行されていたのか、検証を試みたい。

また、実際の誌面構成および記事の内容についても詳細な検討を行い、そこでどのようなコミュニケーション形成が志向されていたのか、ということについても検討したい。

『事典』の長野県を担当した牧義之は、地方雑誌と文化、文学の関係について、伝田精爾(青磁)の活動を軸に考える。教科書を使わない自由教育が弾圧された代表的事例として、一九二四年に松本女子師範附属小学校で起こった「川井訓導事件」がある。文部省の方針に従って県学務当局と地元教育会が教育現場から赤化・アカと目される活動を排除したこの事件は、九年後の「教員左翼運動事件」につながる。川井とともに現場を去った伝田は主席訓導であったが、後に赤化教員を排除する県職員側に立つ。戦後には雑誌「比

牟呂」を主宰して甲信越地域の文学活動を一般人として支えながら、県内の公民館運動、教育活動に関与した。現在は地元でも顧みられることのない伝田の教育・文化・文学における活動について、彼が関係した雑誌や諸資料から考える。

『事典』の索引を担当した渡部裕太は、作家たちの地域横断的な作品発表に着目する。例えば福島県に疎開した榊山潤は、同県の『地方人』をはじめ、秋田県の『月刊さきがけ』、岩手県の『東北文庫』、宮城県の『月刊東北』などのほか、高知県の『月刊高知』、福岡県の『村の科学』などにも寄稿している。疎開や療養のための作家の転居は、大都市の文壇と地方雑誌の編集・発行人とのあいだに人的ネットワークを形成する大きな契機のひとつと考えられるが、作家には複数の地域の地方雑誌を選択的に作品発表の場として活用する可能性も開かれていた。このことが作家の創作にいかなる影響をもたらしたのか、検討する。